
御降誕八〇〇年のお題目に向かって

—人口減少時代の教化学（平成21～27年）—

はじめに

写真家・吉田功氏は、埼玉で20校以上の廃校やその地域の人びとと交流し、写真に残したが、そのとき感じた驚きを次のように表現している。

広い体育館にたった一人の新入生が座る入学式、一、二年生が一緒に学ぶ教室……。老人ホームを訪ねた時には、わずか9人の「全校児童」が地域の30～40人のお年寄りの前で歌や踊りを披露する。その姿に「これが日本の人口構成の縮図か」と息をのんだ。（日本経済新聞 平成27年9月18日）

ことさらに寺院だけが消滅するのではない。わが国の人団構成の推移の前には、学校、小売店をはじめ、病院でさえも消滅していく。

現在、人口減少が深刻な地域では、自治体はもとより、住民、そして新しい生き方を志して都会から来た人たちが協力して、人口減少の流れをくい止めようと努力している。3年前に訪ねた中部地方の山村では、「30年後も小学校のある村づくり！」をスローガンにかけ、魅力的な地域再生に取り組んでいた。30年後に、子どもの歓声がひびく小学校が存在していれば寺院も残っているのではないだろうか。

最近、全国各地の教区教化研究会議に参加し、教師の発言に耳をかたむけていると、心に響くことばに接することがある。

「一度でも手を抜いたら、ダメになる」。これは、通夜説教がさかんな教区で、一人の教師が、自分に言いきかすように語ったことばである。分散会参加者の一人ひとりがうなずいていた。

「10軒の檀家でがんばっています」、と強い口調で語った若い教師。いったい、どういう方法でがんばっているのだろう、と内心思ったが、彼は明るく、迷いはなかった。

炎天下、8・6の広島に向かう修行僧の姿は、ただありがたい。
 「お寺の近くの休耕田に田植えをしたら、おおぜいの人が参加しました」と、笑って話す若い住職。

宗祖の『事理供養御書』のことばを思ひうかべた。

凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり。(定遺1262頁)

このような志しをもった教師の発言に勇気づけられる。人びとは彼らの志に共鳴し、ひそやかに信仰の輪は広がるのではなかろうか。お寺が元気になれば、地域も再生する。

次の一文は昭和4年(1929)頃、柳田国男氏(1875~1962)が述べたことばとして紹介されたものだ。

美しい村が初めからあったわけではない。美しく暮そうという村人がいて、美しい村となったのである。

人口減少時代が始まるとともに、東日本大震災が起こり、それは地方の人口減少問題をいっそうわき立たせ、東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故は、地域の未来に大きな影を落とした。加えて、戦後70年のこの夏には、わが国の進路を変える安全保障法案が可決された。

乱世ともいるべき日本である。そこで問題は、私たちがどのような国のすがた、世界のかたちを求めているか、にあるのではないだろうか。「立正安國・お題目結縁運動」とは、ひとえに一人ひとりの教師の生き方の変化から生まれるのである。

ここ数年間、現代宗教研究所が開催した中央教化研究会議をはじめ、その他の行事では多くの問題が討議された。その一部を紹介したこの冊子が、聖誕八〇〇年を迎える教師の教化活動の参考になることを願っている。

ISSN 0289-6974

現代宗教研究

第47号

■専題	原 正 賀
■第四回中央教化研究会議	
基調報告 『宗教文化研究考』	原 正 賀
基調講演 三・……後の生き方を考える	内 山 邦
全体会議 (分科会報告)	
■研究ノート	
平成元年消種地寺院調査報告を基とした関連調査(1)…	河 城 俊 宏
首都直下烈 (東京湾地震) 地震について	
—東日本大震災以後の対応を考えるとして—	小 林 康 洋
罪論に関するアンケート結果の考察(うえ)	中 村 駿 実
高木二三奈の研究—伏見賀賀との關係を中心として	齋 藤 宣 祐
人間と天体物理	石 伏 譲 喬
アメリカ歴史から見る後世開教があり方	川 口 重 徳
表記別部書の紹介に見る「花經羅が子なり」の一考察(1)…	鶴 内 歩
■ミニ講演	
原義をどう捉えどう伝えるか	高 佐 宣 長
■平成二十四年度 第二十三回法華經・日蓮聖人・日蓮教説研究セミナー	
インド大乗佛教の成りと教説	下 田 正 弘
中興仏教における清貧	
—その底文の背景と集団としての成立—	我 輪 譲
ハヌカディスクッション	
「教説とは何か—新しい歴教史からその明日を考える」を想議して	三 原 正 賀
■研究・調査プロジェクト報告	
現代教化部門	
創価学会新潟佐渡会館建設の調査報告	小 田 修 造
北米に於ける教説(ダルマ)の探求—その当時と現在—	マコミック編集

平成25年3月
日蓮宗現代宗教研究所

所報『現代宗教研究』47号